

芭蕉と無常觀（芭蕉と佛教Ⅰ）

鑑 本 光 信

芭蕉と佛教との關係は、個々の例を拾うだけでも極めて多い。從つて私としては新しい研究を中心に、佛教各宗や特に禪との關係若干例を加えつゝ概略を發表したのであるが、紙數上、芭蕉と無常觀について概説する。

無常觀は佛教思想の根柢をなし、背景となる思想で、それはまた、佛教の核心をなす菩提心ともいわれる。道元禪師の學道用心集にも、「菩提心とは多名なれども一心なり、龍樹祖師の曰く、唯世間無常を觀する心も亦菩提心と名くど、然あれば乃ち暫く此心に依りて菩提心と爲す可きもの歟……古來得道得法の聖人同塵の方便ありと雖も未だ名刺の邪念あらず法執すら尙なし況んや世執をや、謂ゆる菩提心とは前來云ふ所の無常を觀する心便ち是れ其の一なり……とある。」

芭蕉の無常觀について見るに、先ず幼少時より仕えて可愛がられる藤堂主計良忠蟬吟の死は、蕉のいう「仕官懸命の地」の希望が絶たれたことで、一般に徳川封建制下で、相手方、反對側の主君が出ることは、いわば迫られることになることが多く、長年の間薄祿に甘んじつゝ忠實に仕え、蟬吟が家督をついで自分も適當な祿を受けて仕えるための、長年の努力も希望も消えたことは、世間無常の觀を痛切に感じさせたことであらう。更に江戸大火の節に芭蕉庵も類

焼し、小溝にひたつて難を逃れたといわれるが、蕉はその感を「猶如火宅」の思いと、法華經の句を引用して述べているが、これまた彼の無常觀を更に深めたと思われる。天和三年六月の母の死も、故郷離れて遠き江戸の地に長く居住していた蕉にとりては、心に大きくひくことで、無常觀をより一層深めたと考えられる。その翌年野晒紀行に旅立つが、その冒頭の句、「野ざらしを心に風のしむ身かな」にも無常觀の深まりをしるはせるものがある。私は研究によつて、野晒紀行における「禪の生成」を主張するものであるが、その根柢にあるそして巻頭句の「野ざらし」に見える無常觀と、禪との關係は注目すべきであらう。

俳諧は歐米の詩にも影響し、米佛の Imagism の運動は俳諧が一重要契機となつてゐて、Imagism の著者 Colman はノーベル文學賞受賞の Eliot の詩の前奏曲集の部分を引いて論じてもいるが、前奏曲集 Preludes の最後の句、「世界は廻る廻る——がらんどうの家跡で、薪を集める老婆のようだ。」The worlds revolve like ancient woman Gathering fuel in vacant lots. 又、芭蕉の「のさらしを」の句は、前者があることがおそろうとの前奏曲の最後に、後者が前述の野晒紀行の前奏にある點と、双方共に無常觀的な背景に立つ點で類似している。

金剛經との關係について——「奥細道菅菰抄」には細道引用書目として多大の書が記され佛典も多いが、中に金剛經がある。學會の發表途上に金剛經に言及して、それ程良い經典と思えぬ旨の言が、有名學匠から口頭で批判的になされることがあるが、禪宗の中國五祖以來の金剛經の重視、特に壇經によれば六祖が金剛經、涅槃經に通じていたのは明らかで、賣柴生活中金剛經讀誦を聞いて本意を了

したともいわれる。日本でも曹、臨を問わず重視せられ、「奥の細道」にもある蕉の参禪の師佛頂和尚の「堅横の五尺にたらぬ草の庵、むすぶもくやし雨なかりせば」等にも金剛經の影響が考えられ、道元の無所得や前述の學道用心集等にも影響が考えられる。思うに、金剛經の背景をなす痛烈なる無常觀と無執着の要請は、重要な一特色であろう。金剛經は古來諸家の愛翫し、特に禪宗に尊重せられ來つたものゆえに、その各宗に通ずる佛教根本の無常觀や、特に南北二宗の系統の區別の歴史的事實と、哲學的、深層心理學的研究や、或いは區別を離れた廣い立場で、從來の東西洋の學者の研究の上に、印度學、佛教學の新研究成果を驅使しての新しい研究も必要と考へる。また批判には、たとえ片言隻句でも具體的になすことが、從來注目、尊重されたものへの禮義であり、學者や後進への親切と考へる。或いはまた、佛教史上の史的事實と虚構の問題も、種々の虚構的なものゝ指摘研究の勢には敬意と感謝の念を感じるが、疑うべきは疑うとして、その教理闡明の上からの虚構と、單なる虚偽についても再考あるべきで、大にしては大乘經典一般の性格や生命の問題とも關係もあることと考へる。

さて芭蕉には前述の佛頂からの影響と共に「笈の小文」の乾坤無住同行二人とか、無依の道者（無依の道人は臨濟錄等にも見える）や空手（道元の言は有名。但し白樂天の送張山人歸嵩陽に「長安古來名利地、空手無金行路難」ともある）等にも見られる。芭蕉俳論の中核をなす「風雅の誠」は、俳諧を生み出す本源のまことであり、それは私意小我を捨て去つて大自然と一體となつたところに生ずる嵩高な意力であり「造化にしたがひ造化にかへれ」というのも同じ意である。「……翁曰く俳諧に暫くも住すべからず。住する時は

重し」等の、晩年にいたつて説く蕉の「かるみ」の俳論の語句にも、金剛般若經の影響が伺える。芭蕉俳文の「無常」の語は、佛の御心に衆生の憂き世を見給ふもかゝる事にやと、無常迅速のいそがしさも我が身にかへり見られて」とか「羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん是天の命なりと、氣力聊かとり直し、路縱横に踏んも、伊達の大木戸を越す」等がある。其他無常觀を表す語句は多い。私は芭蕉のもので現在も多くの人々に親しまれ愛されている句や、日本の各地方での風物を詠じた句が尙親しまれ、身近く感じて愛好される根柢には無常觀と一所不住にて旅を愛す清淨觀からくる、土地、人、風物へ對しての親しさ、なつかしさがあるからと考へている。それには、「笈の小文」にも見える「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其の貫道する物は一なり」の「風雅の誠」と共に、茶道の「一期一會」に通ずるものがあると思う。

- 1 大智度論（龍樹）三十七菩提分法の四念處の一に「觀世間無常あり。
- 2 それに關し他にも重要類似がある。「宗教研究」第23回學術大會號の「エリオット詩學と芭蕉（鑑本）」御參照
- 3 鹿島詣に「（佛頂の）今は世を連れて……尋ね入りて臥しぬ。頗る人をして深省を發せしむと吟じけむ。しばらく清淨の心を得るに似たり。」とある。
- 4 赤冊子。
- 5 笈の小文。
- 6 去來、不玉宛論會。
- 7 更科紀行。
- 8 奥の細道
- 9 野晒紀行第一句につき「秋十とせ却而江戸を指す故郷」（句錢別樣式）。前年母の死と無常觀、句錢別樣式の江戸の地への挨拶句——種々の、重層イメージ御參照素堂の錢別詩の序に「老人（芭蕉）常謂他鄉即吾鄉」とある。